

2021年6月12日  
年間第11主日  
菊地功大司教 メッセージ

「神の国を何にたとえようか。・・・それは、からし種のようなものである」と語るイエスの言葉を、マルコ福音は伝えています。

取るに足らない小さな種から始まって、「葉の陰に空の鳥が巣を作れるほどの大きな枝を張る」までに育っていく過程を述べて、神の創造の業が人間の常識をはるかに超えた神秘のうちにあることを思い起こさせながら、イエスは神の国の実現への道を語ります。

エゼキエル書も同じように、レバノン杉の小さな梢を切り取り、山の上に移すことで、今度は大きな枝を張るレバノン杉が育っていくことを記し、それをつかさどる神の力の偉大さを伝えます。

パウロは、わたしたちの永遠の住みかは天にあるのだとしても、この地上での生活には重要な意味があることを指摘し、「体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれるものでありたい」と記します。

すなわち、わたしたちは、主とともに天上の神の国で永遠の喜びのうちに生きることを望んでいるとしても、同時に、今生きているこの世界の現実の中で、同じように神に喜ばれるものとして、主から与えられた使命に忠実に生きる務めがあることが、パウロの言葉から示唆されています。

わたしたちには、主イエスの福音を、ひとりでも多くの人に伝えるという使命が与えられています。その業は、派手なパフォーマンスによって達成されるのではなく、小さな努力の積み重ねの上に成り立つのだということを、からし種のたとえから学びたいと思います。一人ひとりの小さな働きは、まさしくわたしたちが播く小さなからし種であります。しかしその種は、神によって育まれる限り、人間の常識をはるかに超える実りを

もたらします。救いの業は、神の業であって、わたしたち人間の業ではありません。

去る5月11日、教皇フランシスコは、自発教令「アンティクウム・ミニステリウム」を発表され、信徒の奉仕職としての「カテキスタ」を正式に制定されました。

カテキスタというこの奉仕職は、決して新しいものではなく、すでに新約聖書の中に、初代教会における務めとしてその役割を見いだすことが出来ます。教会は当初から、聖霊の働きに従順に従い、教会の働きのために生涯をささげた信徒によって果たされる、さまざまな奉仕職によって支えられてきました。

第二バチカン公会議以降、教会は福音化の働きにおける信徒の役割の重要性を強調してきました。第二バチカン公会議の教会憲章に、こう記されています。

「信徒に固有の召命は、現世的なことがらに従事し、それらを神に従って秩序づけながら神の国を探し求めることである。自分自身の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパン種のように内部から働きかけるためである」(31)

カテキスタは、入信の秘跡の準備から、信徒の生涯養成にいたるまで、神の民に奉仕するための信徒の召命であり、社会におけるパン種として働きかける生き方でもあります。パン種のように、またからし種のように、小さな一人ひとりの忠実な奉仕が、聖霊の導きのうちに、神の国の実現のために大きな実りを生み出します。わたしたちは小さな事に忠実に生きるよう、呼ばれています。

新しく制定された信徒の奉仕職としてのカテキスタに限らず、キリスト者には、すべからず自分の召命に生きる務めがあります。神からの呼びかけに忠実なものでありましょ